

症 例 の 概 要

カテゴリー：上顎前突

発表者名：好田春樹

題名：**12**の先天欠如，著しい叢生および過大な FMA を伴う骨格性上顎前突症例 男・**女**

初診時年齢：21才 6ヶ月

治療開始時年齢：21才 7ヶ月

治療期間：3年 0ヶ月(36ヶ月)

診断 **12**の先天欠如，著しい叢生および過大な FMA を伴う骨格性上顎前突症

●抜歯部位

7 4	4 7
8 4	(2) 4 8

12は先天欠如

●治療に使用した装置、
 Edgewise Begg Functional
 その他

●Auxiliaries とその期間

Face bow Type : か月 Class II elastics : (10)か月
 Class III elastics : か月 その他

●診断時の留意点・治療方針:

- ①ANB 7.4° の骨格の前後的不調和
- ②上下顎ともに著しい arch length discrepancy
- ③**12**の先天欠如
- ④FMA 46.5° で著しく過大
- ⑤overjet 7.8mm overbite -2.0mm
- ⑥口唇の突出とオトガイの後退
- ⑦上下顎切歯の唇側傾斜
- ⑧両側とも Class II 大臼歯関係
- ⑨上下顎第三大臼歯あり (上顎は比較的良好な形態)

●治療術式とその期間(治療経過の要約)および 提示資料採得時期

年 令	21 y 6m	24y6m	26y6m
資料採得時期	☆ 初診時	★ 動的治療 終了時	★ 保定中
使用装置の種類			
Edgewise 022	●	●	
Headgear	●	●	
Class II elastics	●	●	
Retainer		●	●

●保定装置の種類と期間
 上顎：2+2 fixed andwrap-around type retainer (25か月)
 下顎：3+3 fixed type retainer (25か月)

Cephalometric Analysis

AORK 近畿矯正歯科研究会

カテゴリー : 上顎前突

発表者名 : 好田春樹

題名 : 2の先天欠如, 著しい叢生および過大なFMAを伴う骨格性上顎前突症例

男 ・ 女

	初診時 21y 6m	動的治療終了 24y 7m	保定中 26y 8m		初診時 21y 6m	動的治療終了 24y 7m	保定中 26y 8m
SNA	76.8	76.8	76.8	Interincisal angle	110.0	130.1	130.3
SNB	69.4	69.4	69.4	Occlusal Plane to FH	8.6	13.4	13.7
ANB	7.4	7.4	7.4	Occlusal Plane to SN	16.7	21.5	21.8
Facial angle	77.1	77.1	77.1	U1 to NA (° /mm)	30.0/11.1	13.4/ 4.0	13.0/ 4.0
Y - axis	75.8	75.8	75.8	L1 to NB (° / mm)	32.7/13.9	29.1/11.8	29.5/12.0
FMA	46.5	46.5	46.5	Overjet (mm)	7.8	3.9	3.7
Gonial angle	132.8	132.8	132.8	Overbite (mm)	- 2.0	2.6	2.9
U1 - SN	106.8	90.2	89.8	Witz appraisal (mm)	12.3	+ 6.9	+ 6.9
L1 - Mn (IMPA)	88.9	84.9	85.1	E-line : Upper lip (mm)	7.3	5.1	5.1
FMIA	44.6	48.6	48.4	E-line : Lower lip (mm)	10.1	8.1	7.1

ま と め

カテゴリー： 上顎前突

発表者名： 好田春樹

題名： ②の先天欠如，著しい叢生および過大な FMA を伴う骨格性上顎前突症例 男・女

考察：

この症例では、②の先天欠如でありながら上下顎ともに著しい arch length discrepancy を示した。また、 ANB 7.4° の

骨格性前後的不調和、overjet 7.8mm そして上下顎切歯の唇側傾斜もみられた。下顎歯列では、②の先天欠如があったが

あえて④④を抜歯して、arch length discrepancy と下顎切歯の歯軸改善を目指した。上顎歯列では、④④を抜歯して

arch length discrepancy と上顎切歯の歯軸を改善し、overjet の減少を目指した。ところが、上下顎歯列の歯数不一致に

よって tooth size ratio が著しく過少となり、5.9mm の maxillary excess と示された。③③の配列と④④の抜歯空隙が閉

鎖された後、ARS によって上顎歯列の total tooth size を 2.8mm 減少させた。Excess value は 3.1mm に減じられたが、

未だ maxillary excess であるので、上下顎歯列の形態を前歯部で丸型のアーチフォームに調整して対応した。大臼歯の咬

合関係は Class I が達成されたが 1mm 程度 overjet が余剰となって動的治療を終了した。動的治療期間 36 か月。

保定開始 2 年 1 か月経過しているが、患者の協力がよく概ね良好安定に推移している。